「初夏の十勝平野」

東京本別会　陶　久　悦　子

二年ぶりの帰郷は、はからずも十勝平野が最高に輝いている7月の初めのこととなりました。はるかに雪をいただいた日高山脈をのぞみ、子どものころに遊んだ川は変わらず清流の音を響かせ、広い畑ではジャガイモの花が咲き揃い、小麦の穂が色づき始め風に揺れていました。故郷を離れて50年ともなると気分はすっかり観光客です。子供時代にも若いころにもさほど感じなかったわが故郷の素晴らしさを改めて実感しました。本別の町の全体を見渡せるという展望台にも登ってみたかったのですが、夕方の時間切れで断念。

折しも、母校である本別町立本別中学校では来春、卒業生の総数が1万人を超える予定とのことで、記念事業も企画されているようです。学校の統廃合を耳にするなかですが、卒業した者の一員として誇りを感じるとともに、母校がこれからも長く存続していくことを祈らずにはいられません。

十勝コンビの私たち夫婦、主人は池田町の出身です。中学校の同期生会出席が第一目的の今回の帰郷訪問でしたが、急きょ兄弟姉妹旅行を思いつき、然別湖、層雲峡にも足を伸ばしました。85歳を筆頭に、平均年齢75歳7人でのドライブ旅行もなかなか爽快なものでした。黒岳5合目からは大雪の山々をしっかりと眺める初体験もできました。

わが故郷、十勝は最高！

食の記憶と人生

東京札幌会　会長　金　曽　裕　一

藤幼稚園
昭和22年冬

母が夕飯の支度をしていた、卵買ってきてと頼まれ、料理に使うと聞いて小さな肩ポーチに卵を5個入れ一目散に家を目指した。が家の引き戸レールにつまづき、卵は無惨にも全部割れていた。情けなくて大泣きし、母に謝った。この頃、卵は貴重な食品で、人生初の失敗の想い出となった。

北九条小学校1年　昭和23年4月

祖母に連れられ入学式。教室には粗末な木製の椅子と机があった。全員の机上に平らな黒い明治板チョコ1枚が置いてあった。嬉しかった。チョコも珍しかったが、時々担任が帰り際に大きな丸いザラメをまぶしたカラフルなアメをくれた。頬が膨らむほど大きい。甘いものが世の中に少なかった時代であった。

北辰中学　昭和30年頃

戦後の食糧難は続いていた。クラス替えをするとまず友の親が食料品店か食堂をやっていないか聞いて親しくなった。遊びに行くのが楽しかった。

札幌北高　昭和34年頃

下宿生だった私。下宿のおばさんの弁当の米飯は大盛り。だからおかずが少なかった。黄色い沢庵と梅干しは豊富で、それが毎日のおかず。早飯常習犯。食べ盛りで、空腹の毎日。ある時、クラスのトッポイ友が私の弁当を覗き、哀れんで自分のおかずを分けてくれた。友のおかずも質素だったのに。

大学生　昭和38年頃

食に興味を持ち、食品会社志望を決め、大学のゼミは食品化学講座。

社会人となって50年の現在

雪印から数えて現在4社目。4社とも食品メーカーで現役続行。食の仕事は無限に楽しい。

設立二十五周年記念講演寺島実郎さん ふるさと沼田町を語る

東京沼田会

首都圏などに在住の沼田町出身者でつくる東京沼田会の総会・懇親会が昨年11月9日、東京都千代田区のアルカディア市ヶ谷で開催されました。当日は沼田町から金平嘉則町長、杉本邦雄町議会議長らが参加、祝辞のほか、町の状況とふるさとの思いが紹介されました。田坂会長からは「諸先輩によってつくられた会も25年を迎えました。その伝統を引継ぎながら沼田町に貢献でき、会員にもメリットのある会にしていきたい」とあいさつがありました。

「沼田町の思い出」を語る寺島実郎
日本総合研究所理事長

総会は、設立二十五周年を記念して、同町出身で名誉町民の日本総合研究所理事長・寺島実郎さんが「国内外の情勢と沼田町の思い出雑感」をテーマに講演。北海道の地域性を生かしたロシアなどとの交易が今後深まる可能性を述べ、沼田町のビジネスチャンスにも触れました。生まれた沼田町の思い出として「雪が多くて2階の窓から出入りした覚えがある」などと話し、幼いころに引っ越したため思い出はいつも祖父母・父母から聞かされたようです。両親の転勤で沼田町から道内及び九州へ、そして札幌における高校生活、さらに三井物産勤務でのワシントン、イランなどの海外生活を紹介し、中近東情勢も解説しました。

同会は、二十五周年記念事業として会報を復刊したほか、北海道三大あんどんのひとつである「夜高あんどん祭り」のツアーを企画し、町民たちとの交流を深めました。